眼 性 斜 頸 の 2 例

久留米大学医学部整形外科

長谷川 善 廣・井 上 明 生
奥 野 徹 子・村 山 哲 郎
檜 原 知 啓・大 橋 輝 明
宮 崎 正 樹

Two Cases of Ocular Torticollis

by

Yoshihiro Hasegawa, Akio Inoue, Tetsuko Okuno, Tetsuro Murayama,
Tomohiro Narahara, Teruaki Ohashi and Masaki MiyazakiDepartment of Orthopedic Surgery, Kurume University
School of Medicine

Two cases of ocular torticollis were reported. One case was a 3-year-old female, and another case was an 8-year-old male. These cases had been diagnosed by orthopedic surgeons as a habitual torticollis. They were introduced to our university hospital because their torticollis position had not been improved after three years old.

It was revealed by examination that sterno-cleido-mastoid muscle and range of motion was normal. Their torticollis position was improved by Patch test on one eye and Bielschowsky head tilt test was positive. These findings suggested that it was due to ocular torticollis. They were treated by an ophthalmologist and improved.

は じ め に

眼性斜頸は乳児期には診断が困難な上、頸部可動域および胸鎖乳突筋に異常がないため、整形外科を受診した際、くせまたは異常なしと診断されることが多い。

今回、われわれは、習慣性斜頸との診断を受け放置されていた眼性斜頸の2例を経験したので報告する。

症 例

症例1：3才2ヵ月、女性。

主訴：右斜頸位。

現病歴：出生時は正常分娩であり、特に異常は指摘されなかった。生後11ヵ月に、母親が右斜頸位に気づき整形外科医を受診。習慣性斜頸との診断を受け、以後放置されていた。3才2ヵ月になっても右斜頸位が軽減しないため、他医を受診。原因がつかめない斜頸とのことで当科紹介された。

既往歴：特記すべきことなし。

家族歴：特記すべきことなし。

初診時所見：右斜頸位がみられたが(図1-a)、頸部可動域制限、胸鎖乳突筋の異常など、先天性筋性斜頸を疑わせる所見はなかった。X線所見でも特に異常は認められなかった。しかし Bielschowsky 頭部傾斜試験にて眼球の偏位が出現し(図1-b)、一眼の遮閉試験にても斜頸位は消失した(図1-c)。以上より眼性斜頸と診断し、久大眼科に紹介した。

眼科にて、左下斜筋過動症による眼性斜頸との確定診断を受け、左下斜筋切断術が行われ、術後斜頸位は消失した(図2)。

症例2：8才3ヵ月、男性。

主訴：左斜頸位、顔面非対称。

現病歴：出生時、特に異常は指摘されなかった。生後6ヵ月、左斜頸位に母親が気づき近医受診。習慣性斜頸との診断を受け以後放置されていた。5才頃、顔

図1 a:初診時 3才2ヶ月 右斜頸位
b:Bielschowsky 頭部傾斜試験にて眼球の偏位出現
c:遮閉試験にて斜頸位が消失

図2 4才8ヶ月 左下斜筋切断術後、斜頸位は消失している。

面非対称が出現した。8才3ヵ月のとき、左斜頸位が軽減しないため、当科受診。

既往歴：特記すべきことなし。

家族歴：特記すべきことなし。

初診時所見：左斜頸位および顔面非対称を呈していたが(図3-a)、頸部可動域制限および胸鎖乳突筋の異常などは認められなかった。X線所見でも異常はなかった。しかし Bielschowsky 頭部傾斜試験にて眼球の

偏位が出現し(図3-b)、一眼の遮閉試験にて斜頸位は消失した(図3-c)。以上より眼性斜頸と診断し、

眼科にて、右下直筋麻痺による眼性斜頸との確定診断を受け、左上斜筋腱切離術が行われ、術後斜頸位は消失した(図4)。

考 察

眼性斜頸は、眼球の回旋偏位によって生じる複視を修正するために斜頸位をとるものをいう¹⁴⁾。眼球の回旋偏位をおこす原因としては、外眼筋の中でも眼球の回旋機能をもっている上下筋(上直筋、下直筋、上斜筋、下斜筋)の麻痺および過動症があげられるが、中でも上斜筋麻痺によるものが最も多い。斜頸は整形外科的疾患に起因するものが大半を占めるが、眼性斜頸の診断においては、まずこれらの疾患を否定することが重要である²³⁾。すなわち頸部可動域に制限がなく、胸鎖乳突筋にも異常が認められず、さらにX線所見にても異常がない場合、先天性筋性斜頸、骨性斜頸はほぼ否定できる。したがって、そのような斜頸では、眼性斜頸などの整形外科的疾患以外に起因する斜頸を考えるべきである。

眼性斜頸の診断には簡単かつ簡便な2つの検査法がある。1つは遮閉試験であり、もう1つは Bielschowsky 頭部傾斜試験²⁷⁾である。遮閉試験とは、両眼視でない状態にすれば複視が起らないことを応用したもので

図3 a: 初診時 8才3ヵ月 左斜頸位
b: Bielschowsky 頭部傾斜試験にて眼球の偏位出現
c: 遮閉試験にて斜頸位消失

図4 9才8ヶ月 左上斜筋腱切腱術後, 斜頸位は消失している。

あり、一眼を遮閉することにより斜頸位は消失する。なお、その遮閉試験は右眼、左眼それぞれについて行わなければならない。Bielschowsky 頭部傾斜試験とは、傾斜側の眼は内方回旋、反対側の眼は外方回旋を起こすという生理学的作用を応用したものであり、斜頸位の反対方向に頭を傾斜させると、眼球の偏位が出現す

る。この2つの検査にて上記所見が出現すれば、眼性斜頸の診断はほぼ確定的となる。

以上のことにより眼性斜頸の診断は容易と思われるが、眼性斜頸を習慣性斜頸と診断し放置していたり、先天性筋性斜頸と診断し、整形外科の治療がおこなわれていた例の報告はまれではなく、丸尾ら⁹⁾は眼性斜頸62例中11例が整形外科医にてマッサージあるいはギブス固定などの治療を受けていたと報告している。眼性斜頸はほとんどが眼科手術の対象となり、治療が遅れると顔面非対称および脊柱側弯を合併することもあり、適確な診断が望まれる。

ま と め

習慣性斜頸との診断を受け放置されていた眼性斜頸の2例を経験したので報告した。

参 考 文 献

- 1) 岩重博康・他: 眼性斜頸. 眼科 Mook, 10: 142-149, 1979.
- 2) 岩谷 力・他: 眼性斜頸. 整形外科, 35: 1422-1426, 1984.
- 3) 川村次郎・他: 初診時に原因のつかめなかった斜頸. 中部整災誌, 18: 838-841, 1975.
- 4) Levin, I. M.: Ocular toricollis in children, Am. J. Dis. Child. 44, 1026-1039, 1932.
- 5) Levine, M. H.: Evaluation of the Bielschowsky

head tilt test. Arch. Ophthalmol., 82: 433-439, 1969.

- 6) 丸尾敏夫・他：眼性斜頸とその治療。臨眼，28：507-516，1974.
- 7) Scott, A. B.: Extraocular muscles and head tilting. Arch. Ophthalmol., 78: 397-400, 1967.

質 問 福岡こども病院 坂本 央

当院でも、昨年度、眼性斜頸7例を経験しており、筋性斜頸80例に対して1割弱の来院数である。Eye patch test は、簡単な test であり、Bielshowsky test よりも明確で、眼性斜頸の診断は、難しくないと思われます。

眼性斜頸の場合、患側に傾斜し健側やや下方を向くと教科書的には言われておりますが、いかがでしょうか。また、顔面変形は生ずるものでしょうか。お教え下さい。

解 答 久留米大学 長谷川善廣

- ① 遮閉試験だけでも良いのではという質問へ
解答

融像が発達してくる1才6ヵ月以降に Bielchowsky 頭部傾斜試験は明確になるが、それ以前にも本試験を行う価値はあると思われる。

- ② 顔面非対称は、あったかという質問へ

解答

当科受診時、症例1については顔面非対称は軽度であったが、症例2は明らかな顔面非対称が出現していた。

- ③ 先天性筋性斜頸に比べて顔面非対称の程度はとの質問へ

解答

先天性筋性斜頸に比べて顔面非対称の程度は、軽度と思われる。

- ④ 顎の上げ、顔の回旋の方向はどうかとの質問へ

解答

Chin elevation, chin depression および face turn は、眼球の回旋作用をもっている上直筋、下直筋、上斜筋、下斜筋のなかで、いずれの筋の麻痺および過動症かで異なってくる。